東備西播四ヶ寺巡りに参加して

西部　畑中みつる

密教婦人部の総会を兼ねた四ヶ寺巡りが三月二十四日行われ、私は始めてこれに参加させて頂きました。総参加人員八十八名（内総代さん等男性五名）でバス二台に分乗、うす霜のや、肌寒さを感じる中を七時朝日寺を出発、車内で先ず水野会長さんの挨拶の後、事業報告を聞いている内、備前市蕃山（シヤマ）（江戸中期の有名な学者熊沢蕃山が此の地へ隠居してより此の地名がつく）の中国観音霊場第三番札所正楽寺に七時半到着、本堂に於て先ず御住職先導で一斉に般若心経を唱えて後、当寺御住職より寺の縁起等についてお話をきかせて頂きました。正楽寺は今から千二百四十年程前第四十六代孝謙女帝の時代報恩大師の開基に成り、元和元年（今から三百七十三年前）惜しくも一度灰燼に帰し、現在の建物は宝永年間（一七〇四―一七一一）に建設されたものだそうです。本堂を出て広い寺院内の庭園等暫らく散策の後九時兵庫県太子町の国の重要文化財で聖徳太子の建立された斑鳩寺に到着、此処で約一時間を過し宝物館等見せて頂きましたが、中でも太子が時の天皇、推古女帝（第三十三代）に勝鬘（シヨウマン）経を講義して居られる図（六〇六年）は、他にも仏像等数多く有る中で特に強く印象に残って居ります。斑鳩寺は太子御創建から約一千年の間大和法隆寺の支院であったのが、戦禍で今から四百五十年前焼失、中殿・奥殿は昭和四十三年再建されて居ます。十時過斑鳩寺を出発、春のうら、かな日差しを浴び乍ら朝の寒さは何処へやら国道二十九号線を一路北へ……。そして少し早いが十一時ドライブイン十字路で昼食を済ませ更に北上して第三の予定参拝地安養寺へ……。安養寺は朝日寺老御住職の姉さんが嫁いで居られるお寺だそうで（もう既に故人となって居られるが）此処では本堂をお借りして先ず婦人部の総会が行われ、会長さんの挨拶の後新役員の発表があり、新会長さんに役重瑳禧子さんが選出され、之からの御世話を願う事となりました。総会終了後当寺御住職のお話を承りましたが、此のお寺では信仰の傍ら詩吟、民謡、カラオケ等老若男女交流の場として現代風に運営されて居り、参拝者も非常に多いとか……。他寺と趣きを異にしたモダンなお寺であると思いました。

十三時過安養寺を出発、総代長さんより朝日寺の之までの修築工事完了の御礼と尚此の上老朽化した本堂の修理が必要との御話を伺っている内に最終参拝地である佐用郡南光町の瑠璃寺（此処も老御住職の姉さんの嫁いで居られる寺）へ到着、此処はバス停より約八百米を徒歩で参拝しましたが沿道には恐らく樹令千年以上と思われる周囲三抱え以上の巨大な杉の良木が立ち並んで居るのには驚きました。往古より人間共の醜い争いを此の老杉は何の様に提えているのか、世の移り変りを数十米の上空より凝と見つめている様に感じました。如何にも霊域と言った感の漂いの中を本堂に着き御住職より当寺の縁起を聞かせて頂きました。瑠璃寺は新西国三十三番札所（最終札所）で御本尊は、千手観世音・薬師如来で第四十五代聖武天皇の御宇行基菩薩の開基と言われ、今から約四百年前（天正年間）焼失し数年を経て文緑年中（一五九二―一五九六）に再建されたもので、前述の沿道の巨木も含めて附近一帯の山林は全部寺の所有だそうです。十五時過瑠璃寺を出発、前会長さん提供の真言宗宗歌いろは唄を聞き乍ら帰路につき家に着いたのは十七時半でした。此の度は始めて婦人部の方々と御一緒させて頂きましたが、今日は雲一つない穏やかな好天に恵まれ、申し分のない行楽日和で一行の皆様方と共に本当に楽しい一日を過させて頂き有難う御座居ました。又、車内或は行く先先に於て一日中何かとお世話下さいました役員の皆様方に対し心より御礼申し上げる次第です。有難う御座居ました。合掌

瑠璃寺

庄田山朝日寺のあゆみ

敷井　川野多喜夫

庄田山朝日寺の前身、加比羅山正通寺が紙面に紹介されるのは、平安時代醍醐天皇延長五年（九二七）延喜式とゆう大冊書の佛閣の頁に

「養老二年（七一六）唐の國（中國）から日本におこしの智藏上人とゆう僧が加比羅山に正通寺を建立された」と記されている。

さてこの養老年間は今から約千三百年前、朝廷の律令がしもじもまで伝へられ、田畑の開墾・税の貢納等が確立し、人々に冠位が授けられた時期で、朝廷は加比羅山を中心に日本一栄えた須恵器（陶器）を貢納さす為、焼物にあかるい唐僧智藏上人をこの地にくだしたのであろう。

この様に寺の縁起が明確で尚且古いのは県下一である。

天平勝宝二年（七五〇）孝謙天皇重病の際、岡山・金山寺の僧芳賀が、都に呼ばれ加持祈祷を行い、天皇の病気が平癒した。芳賀は功により報恩大師の号を賜る。大師は後、備前に四十八ヶ寺をもうけ國家平安、朝廷の御繁栄を祈念する寺をつくった。朝日寺もその一寺として選ばれている。この國家大乗寺としての格式は後後まで大きな力をもつ様である。

平安末期になると武士集団が公郷政治をとってかわり、加比羅山正通寺も最初の目的から遠ざかり、天台宗寺として再出発してゆき現在の庄田に移転、寺名も庄田山旭（ギヨク）寺と改めている。

鎌倉期に入り眞言宗に改宗、庄田山朝日寺と改めている。

当地では平安末期から鎌倉初期にかけ、山中で陶器を造っていた陶工等は、伊ム部方面に移動を始め、七十余ヶ所に屯住していた人々は、ゾクゾク転住した関係で、朝日寺は無人の山中にとり残された古刹として、苦難の路をあゆむのであろうが寛文六年（一六六六）廃寺の憂きめにあい。古文書類は焼却。ご宝物は僧の移動と共に流出した関係で、不詳の事が多い。しかし他県寺院に保存されている物証や、元緑、享保年代池田家へ提出した朝日寺再興請願書の文中より考察すれば備前四十八ヶ寺の一寺として寺領五十石

田畑　十三町八反

山林　庄田村地内全山

最盛期の僧院十三ヶ院

庄田の家紋二十余軒

御本尊薬師如来僧・丈余（室町時代初期作朝日寺藏）大日如来像（鎌倉時代）

地藏菩薩像の両佛（兵庫県西ノ宮市西廣寺藏重要文化財等多くの佛像を保有、仁王門（大門）、辻堂、護摩堂、地藏堂・本堂等、旭谷を中心に建ち並び、管領赤松家の屁護を受けて栄えている。

玉津地区は庄田村と尻海村が明治六年合併して出来た村である。庄田村には庄田山朝日寺（僧坊七院）があり、尻海には龍光山海藏寺（日蓮宗、牛窓本蓮寺末）があったが、寛文六年（一六六六）池田光政は邑久郡内七十四ヶ寺を廃寺にしてしまった。この時、朝日寺も海藏寺も淘汰され、玉津地区からお寺がなくなり不便を感じた両村の庄屋は、たびたび壇寺再興請願書を提出しているが、享保十二年（一七七）迄約六十年間実現をみなかった。

享保十三年、許可　両村の大奉仕により現存見る大伽藍が完成したのである。総工費二百十両。寺領壹石。奉田七反。山林大山をあてられている。

池田家社寺旧記より

江戸時代になっても奈良時代につくられた備前四十八ヶ寺の一寺としての格式は生き続け、池田家は城主、城主の妻子が大病にかゝると、四十八ヶ寺であった寺々に加持祈祷を命じている。朝日寺も例にもれず二代綱政の治政、加持祈祷を行った跡が残っている。又檀家の依頼でも加持祈祷を行い、天保年間だけで五十余通の依頼書が残っている。

江戸時代幕府は、切支丹を厳重に取締った関係、廻船業家の多かった尻海の船は、各舟番所で廻船手形を出し宗門を明らかにしている。又、田植が終ると虫おくり行事で豊作を念じ、寺小屋を開き檀家子弟に学問を進め……等々、檀家との関係を深めつゝ現在に至っている。尚、「なげ銭供養は」昭和六十一年民俗文化財に指定されている。

朝日寺の歴史は、今の建物が再建されてからでも約二百六十年がたちます。この間、檀家の方々の厚い尊崇の気持が寺を支えてきたわけですが、又、歴代住職の努力も見逃がされません。江戸時代には寺は藩の統制をうけていました。そこで藩の記録に寺の事が色々出て来ます。以下は池田家社寺旧記中に見える明和元年（一七七六年）朝日寺の住職が藩から表彰をうけた時の記録です。

朝日寺御賞

邑久郡庄田村

真言宗　朝日寺

右住持義、性質至極実体にご座りて、平生の行方無欲潔白の出家にて、上部を繕い申す様少しもご座なく、檀家より仏事頼み来たる時は随分念入りに執行仕まつるは勿論、檀家の貧者相果てば野送りの入用等、相応にて追善のいとなみ念ごろに仕え遣わし由、右の通りご座候間、施物の多少により読経について親疎仕まつり候様毛頭ご座無く候よし、智識の僧と申すにてはご座なく候らえども、檀家一統殊の外帰依仕まつり居り申すゆえ、将に亦、去年牛窓村真光院住持退院仕まつり候につき無住に相いなり、朝日寺代判あい勤め居り申し候処、真光院檀家の者共も殊の外帰依仕まつり候。

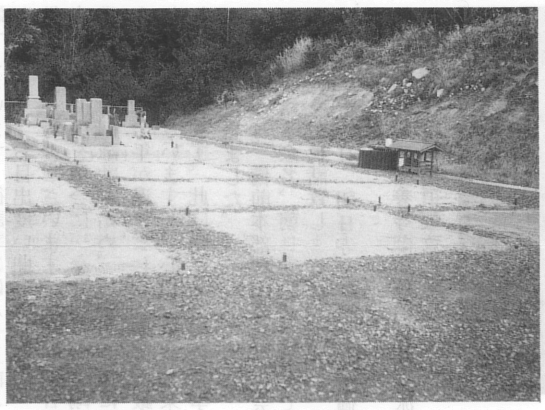
右の様子承り候に付吟味仕まつり候処、相違なくご座あい聞き申し候、この義は寺社方にて取り計らい候様にも右の趣申し上げたく方々奉まつり伺い候。以上

安藤与一左衛門

賞として藩より金子百疋を遣わすとある。

墓地造成

第一期に続き第二期分として十二区画を造成いたしました。菩提寺を間近に望め、車でそばまで乗りつけられる便利な墓地です。費用も九平米で永代使用料二十七万円、年間管理料二千四百円と、町の墓地に比べはるかに安く求められます。又、後継ぎがいないなどの理由で墓の守をしてもらう人がない方のために永代供養塔を建てております。二十五万円で永代にお骨をおまつりし供養いたします。墓地の事を思われている方、ご相談下さい。近所の方にもお話し下さい。



本の紹介

備前内にある高野山真言宗の寺八十ヶ寺を紹介した本が完成しました。私達の身近な所にそれぞれ由緒をもった立派な寺が多くあります。この本には寺々の由来・場所・道順等が記載されていますので尋ねるには重宝です。一冊五百円です。申込は朝日寺まで。

句三題

間口　山田武雄

雨けむる瀬戸の内海墨絵にて
　ねり絹のべし水面すべりて

一だんと雲の明るきあのあたり
　朝日昇るか見えず見るかも

うす墨の屋島あらわに見えそめぬ
　のんびりと行くフェリー船上

十三仏巡り

九、勢至菩薩

如来は弟子として二人の菩薩を両脇にかかえておられます。観音さまと共に阿弥陀さまの弟子として、ひかえておられるのがこの勢至さまです。

観音さまの方は慈悲の仏さまとしてあまりにも有名ですが、智恵の仏さまとしての勢至さまはあまり我々になじみがありません。

智恵の文珠というように文珠さんの影にかくれてしまっている感がします。

勢至とはこの上ない勢いをもったという意味で大きな智恵でもって人々を悟りに導く仏です。

総代会役員

（◎総代長　○副総代長）

庄田　○三浦藤作　○森下繁
渡内　千種司郎
高助　市守用二
大土井　児玉正一
西部　谷亀
市場　◎島岡篤
中東　坂口一海
大東　松井金次郎
敷井　川野忠義
尾張　藤本安治
下寺　内田稲生
問口　山田克己
前泊　内田栄光
虫明　内田長次郎

密教婦人会役員

（◎会長　○副会長　△会計）

庄田　有本小夜子　三浦八千代
高助　藤中和子
大土井　太田定子
西部　◎役重瑳禧子　田中とよ子
市場　畑中みつる
中東　△松岡ひさ子　矢谷秋子
大東　○金居輝子　藤谷良子
敷井　心光きみ子　木下笑子
尾張　川野恵美子　川野寿美子
下寺　出井愛子　八塚よね
○久本千和　内田信恵
久本弥枝子
問口　武内笑子
前泊　内田耕子